県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う

荒田遺跡第6次発掘調査

2001年7月

財団法人 和歌山県文化財センター

例　　言

1. 本書は、和歌山県那賀郡岩出町に所在する荒田遺跡の第6次調査の報告書である。
2. 調査は、県道泉佐野岩出線建設工事に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査の実施にあたっては、和歌山県那賀振興局土木部および岩出町の関係機関から多大な協力を得た。
4. 発掘調査および整理作業、本書の作成は財団法人和歌山県文化財センター副主査黒石哲夫が担当した。
5. 発掘調査に伴う基準点測量・標定点測量および航空写真撮影・遺構図化は株式会社和歌山航測に委託した。

凡　　例

1. 遺構図の方位は国土座標第Ⅳ系を使用し、標高は東京湾標準潮位（T.P.＋）で表示している。
2. 遺構図の縮尺は平面図が1／125・土層図が1／40、遺物実測図は1／4である。
3. 本書で使用した遺構の略号はSK―土坑、SD―溝、SR―自然流路、P―柱穴である。
4. 発掘調査及び整理作業における調査記録（遺構実測図・写真、遺物実測図・写真）は財団法人和歌山県文化財センターで保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・1P
Ⅱ　遺跡の位置と環境・・・・・・・・1P
Ⅲ　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・1P
Ⅳ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・4P
遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・11P

挿　図　目　次

図1　荒田遺跡と周辺遺跡分布図
図2　荒田遺跡年次別調査区画図
図3　溝SD101・102土層図
図4　20区・21区上面遺構図
図5　20区・21区下面遺構図

図　版　目　次

図版1　1.20区上面遺構全景（北西から）
2.20区下面遺構全景（北西から）
図版2　1.20区南東部下面遺構（東から）
2.20区溝SD102（北から）
図版3　1.20区溝SD101土層堆積状況
2.21区上面遺構全景（西から）
3.21区下面遺構全景（西から）
4.20区南西部の鋤溝群（西から）
5.20区溝SD102甕出土状況
図版4～7　出土遺物

Ⅰ　調査の経緯

和歌山県では、近年交通量の増大が著しい県道泉佐野岩出線（県道63号線）のバイパス工事の建設が計画され、昭和63年度（1988）から国道24号線備前交差点から大阪府県境までの6.7km間を4工区にわたり4車線化する事業が開始された。道路の建設予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地として、根来工区には根来寺坊院跡、森工区には尼ケ辻遺跡・荒田遺跡が存在していたため、範囲確認調査や試掘調査を実施後、本調査を行うことになった。

根来寺坊院跡では、平成3・4年度に範囲確認調査、平成5～7年度に合計約10,700㎡の本調査が実施された。その結果、旧石器時代から江戸時代に至る石器・土器・瓦・金属製品・木製品・石造遺物などが出土し、溝・土坑・井戸・柱跡や戦国時代の大規模な堀跡が検出されている。

尼ケ辻遺跡は平成8年度に約3,100㎡が発掘調査され、中世の柱跡・土坑・鋤溝・素掘井戸などが確認されている。

荒田遺跡では平成8年度から試掘調査と本調査が開始され、平成10年度までに5次の調査が実施され、19区間・約8,700㎡の調査が実施されている。その結果、弥生時代の土器棺・柱穴・土坑・溝や中世の掘立柱建物・土坑・溝・井戸などが検出されている。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

荒田遺跡は紀ノ川下流北岸の那賀郡岩出町森周辺の標高34～39ｍを前後する河岸段丘上に位置している。和泉山脈から南流する根来川の形成した扇状地の南端部にあたる。

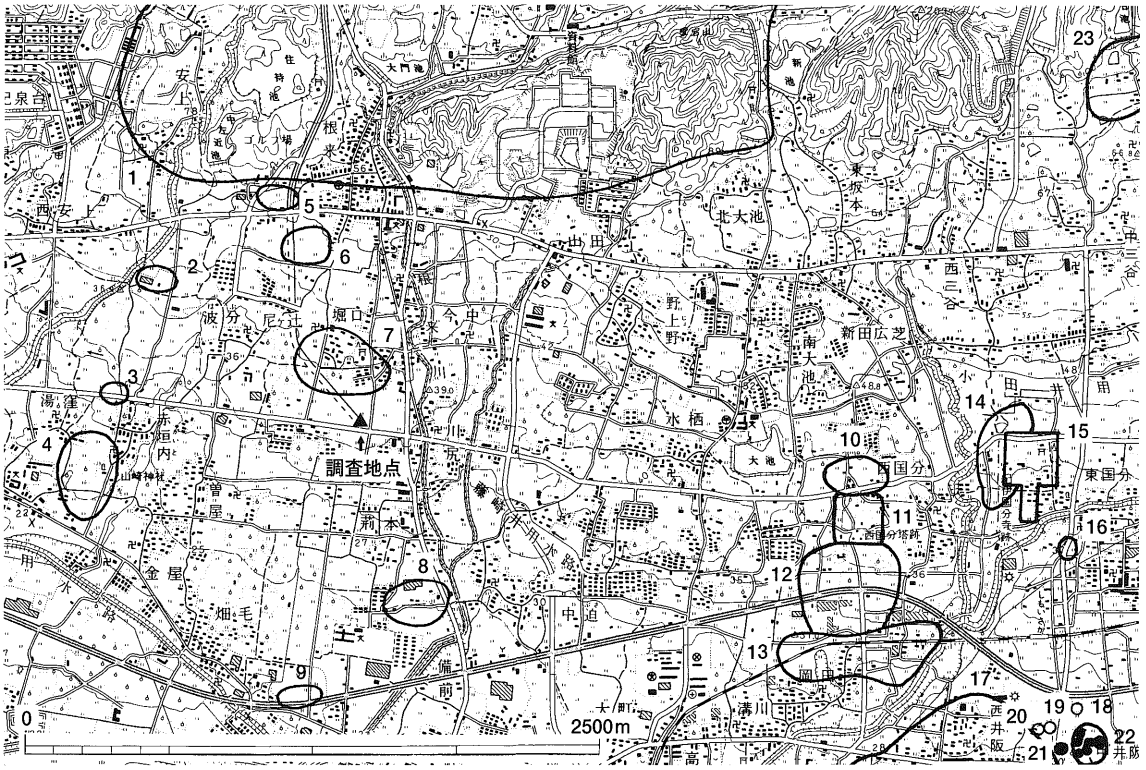
調査地周辺は水田や畑地であるが、宅地化も進行している。当遺跡は1970年代初頭に今回の調査地点から北へ約300ｍ離れた荒田神社周辺で弥生土器や石器が多数採取され、遺跡として周知されるようになった。

荒田遺跡周辺の遺跡の分布密度は比較的低く、北には新義真言宗の総本山で古代末期から現代に至る根来寺坊院跡、根来遺跡（奈良時代～中世）、尼ケ辻遺跡（中世～近世）、西には山崎遺跡（古墳時代～奈良時代）、南には荊本遺跡（弥生時代）などが点在している。これに対して東方約2～3kmの地域には、古墳時代の八幡塚古墳や三昧塚古墳群、岡田遺跡や西国分Ⅱ遺跡や紀伊国分寺跡等の縄文時代から奈良時代にかけての遺跡が密集して分布している。古代には紀伊国の中心部であった地域である。

Ⅲ　調査成果

今回の調査地点は荒田遺跡の南端部に位置し、現有の農免道路との取り付き部にあたる。道路工事及び水道工事の作業工程から、東側の台形部約157㎡を先行して調査を実施し、その後西側の約465㎡を調査した。前者を21区、後者を20区とする。

調査は水田の地味土を機械掘削し、その下は人力掘削で排土した。遺構検出は中世の面と弥生時代の面で行い、写真撮影と図化作業を実施した。遺物は基本的に国土座標軸に則った４ｍ



1 根来寺坊院跡	5 根来遺跡	9 畑毛遺跡	13岡田遺跡	17岡田Ⅱ遺跡	21八幡塚古墳
2 波分遺跡	6 尼ケ辻遺跡	10西国分Ⅰ遺跡	14東国分Ⅱ遺跡	18轟塚古墳	22三味塚古墳群
3 赤垣内遺跡	**7 荒田遺跡**	11西国分廃寺遺跡	15紀伊国分寺跡	19じょう穴古墳	23東三谷遺跡
4 山崎遺跡	8 荊本遺跡	12西国分Ⅱ遺跡	16東国分Ⅰ遺跡	20無名塚古墳	

図１　荒田遺跡と周辺遺跡分布図

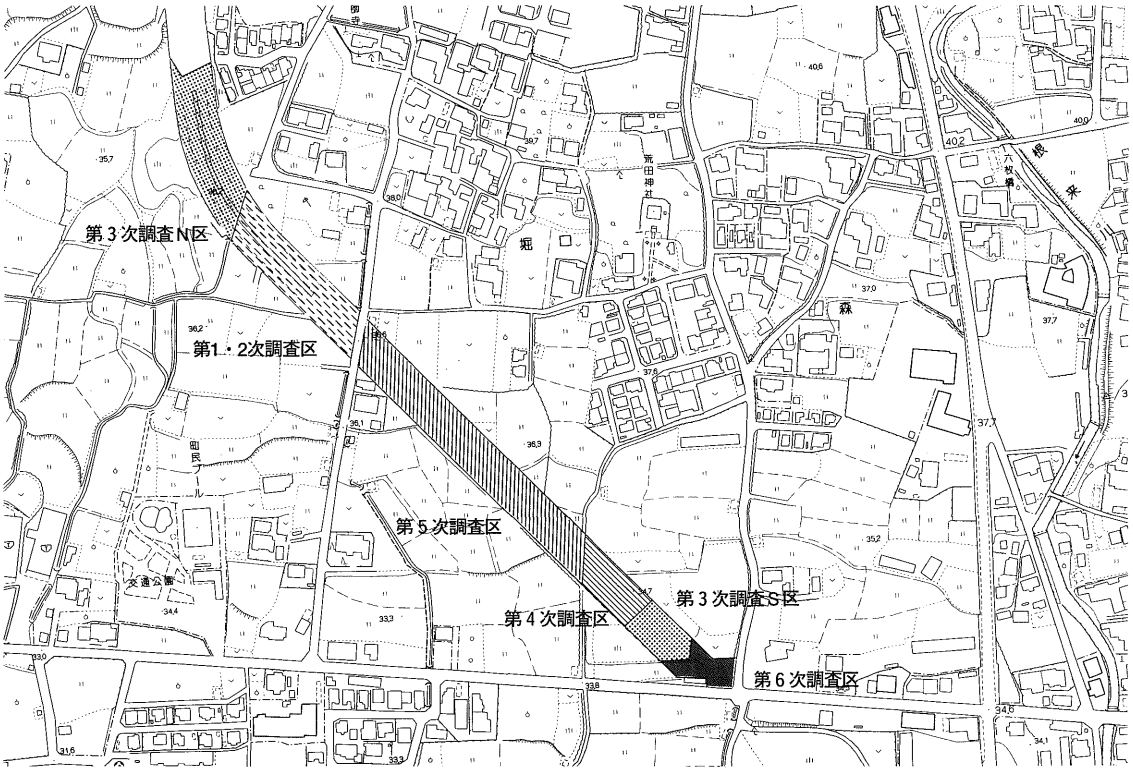


図２　荒田遺跡年次別調査区画図

の区画で取上げた。(4H233区～4S238区)

上面遺構

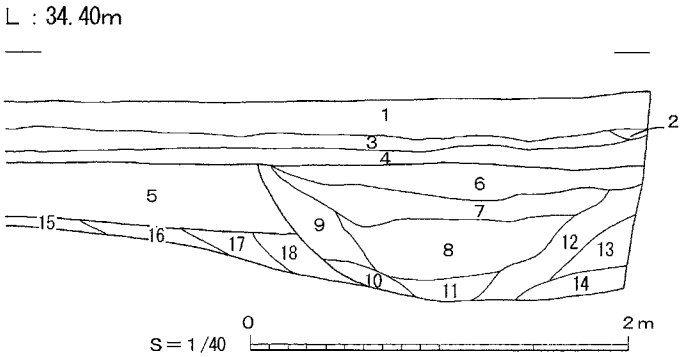
20区の南西部を中心として、中世の細い溝を28条検出した。幅10～20cmで、深さ5～10cmほどである。ほぼ東西南北方向であり、現在の水田区画とも合致している。水田耕作に伴う鋤溝だと考えられる。調査区の水田区画は東西方向に細長いが、鋤溝も東西方向のものが多数を占める。溝からは瓦器椀や土師器の皿の小破片が出土した。土坑は6基検出した。深さ10～20cmほどで、東西方向に細長いものが多い。埋土は溝と同様のもので、水田耕作に関連した遺構だと考えられる。南東部では東西方向に約40cmほどの段差で地形が下がり、湿地状になっている。東西方向に、拳大の石を充填した、幅約60cm・深さ約40cmの近代の排水溝がみられる。

下面遺構

下面では、中央部から東部で柱穴と楕円形状の土坑、西部で溝2条・自然流路1条を検出した。柱穴は直径15～30cm・深さ10～40cmほどである。柱の間隔や方向には規則性は見られず、建物として復原は出来なかった。溝ＳＤ101は北北西から南南東に延びる弥生時代後期後葉の溝である。調査区の西端にあたり完掘していないため、規模は不明だが、第3次調査で、北に延びる部分を確認しており、幅約2.0m・深さ0.6m前後である。弥生時代後期の甕と壺の破片が少量出土した。溝ＳＤ102は北北東から南南西に屈曲して延びる弥生時代後期の溝である。幅2.0～2.8m・深さ0.4～0.6mである。南部では溝ＳＤ101によって削平されており、これに先行する溝である。埋土から磨滅した弥生時代後期の壺・甕・高杯・鉢などがコンテナ5箱ほど出土した。土坑は長径2.0～5.0m・深さ0.2～0.5mで、楕円形状を呈する。出土遺物は皆無であった。自然流路ＳＲ101は幅約3.0mで北から南に深さを増して流れている。遺物は確認できなかったが、土層から弥生時代後期より前の流路だと推定される。

出土遺物

遺物の8割以上が溝ＳＤ102から出土した。弥生時代後期中葉から後葉の土器である。ほとんどの土器の表面が摩滅しており、小破片が多く、上流から流されてきたものと考えられる。器種には多い順に壺・甕・高杯・鉢・器台がみられ、在地の土器である。壺には広口壺・長頸壺・短頸



1 灰色シルト (10Y4/1) [水田地味土]
2 灰色弱粘質土 (7.5Y5/1)
3 オリーブ黄色弱粘質土 (5Y6/3)
4 灰オリーブ色弱粘質土 (5Y6/2)
5 灰色弱粘質土 (5Y4/1) [砂岩礫少量混じる]
6 暗褐色土 (2.5Y5/2)
7 黄褐色土 (2.5Y5/3)
8 黄褐色砂礫土 (2.5Y5/4)
9 灰黄褐色粘土 (10YR5/2)
10暗緑灰色粘土 (10GY3/1)
11暗灰色粘土 (N3/0)
12黒褐色粘質土 (10YR4/2)
13灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)
14鈍い黄色粘質土 (2.5Y6/4)
15浅黄色弱粘質土 (5Y7/4) [砂岩礫少量混じる]
16暗オリーブ粘質土 (5Y4/3)
17灰オリーブ粘質土 (5Y4/2)
18灰オリーブ粘質土 (5Y5/2)

図3　溝ＳＤ101・102土層図

壺などの形態がみられる。甕は中型で底部が厚く突出するものが多い。体部外面の溝状タタキ目は斜め右上がりのものが多く、さらにその上を平坦面で叩き締めたり、ヘラミガキしたものがみられる。口縁端部もタタキ目で整形された甕もみられる。中世の瓦器は底部の高台が退化して低く、口縁部も外側に彎曲している。鎌倉時代後期のものであろう。ほかには、サヌカイトの剥片や、中世の平瓦の破片が出土している。

溝ＳＤ102の土器において、時期がある程度推定可能な皿形の高杯と受口状口縁の甕について検討してみたい。両者については、荒田遺跡から約3.5km西方の和歌山市里・谷に所在する山口遺跡の第5次発掘調査における弥生時代後期の溝ＳＤ－10から出土した土器の詳細な分析が前田敬彦氏によってなされており、参考としたい。(註1)

30はやや大型の皿形高杯で、脚部は欠失しているが、杯部の大きさは復原可能である。杯部の口径（ａ＝25.0cm)、杯部径（ｂ＝18.6cm)、口縁部の長さ（ｃ＝5.3cm）として杯部指数（ｂ／ａ×100；杯部径が口径に対して占める割合）を計算すると74.4である。口縁部指数（ｃ／ａ×100；高縁部の長さが口径に対して占める割合）は21.2である。前田氏は古い順にＡ～Ｉの9分類されており、高杯30はやや新しいＦタイプとなる。受口状口縁の甕には9と10がある。前田氏は受口状甕の変遷を口縁部の屈曲形態からＡ１→Ａ２・Ｂ１→Ｂ２→Ｃ１・Ｃ２と考えており、9・10の甕は屈曲部があまり明瞭でないＣ２類である。高杯と受口状甕の供伴関係については皿形高杯のＤタイプまでにほとんどの受口状甕の製作が終わっているものと推定されている。今回の溝ＳＤ102の例では時期幅のある溝の出土遺物ではあるが、受口状甕Ｃ２は従来より新しい時期の皿形高杯Ｆタイプと同時期まで製作されていた可能性が生じてきた。

溝ＳＤ102からは庄内式土器新段階併行期と考えられる甕8が出土しているが、溝内の柱穴等の混入品だと考えられる。壺は広口壺が多く二重口縁壺はみられない。甕や鉢も体部がやや細長く、底部も下方へ突出する平底やドーナツ状のものである。溝の埋没時期は受口状甕と器台が消滅して二重口縁壺や手焙形土器が出現する直前の弥生時代後期中葉から後葉初頭と考えられる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査地点は検出した遺構や遺物から、弥生時代や中世の集落の中心部から南へ離れた場所だと考えられる。調査区の南端部では地形が一段低くなり、湿地状を呈している。

溝ＳＤ102の遺物出土状況から、北側の段丘上に弥生時代後期中葉前後には集落が存在したものと考えられる。

参考文献・註

1　和歌山県文化財センター　『尼ケ辻遺跡・荒田遺跡発掘調査報告書』2001年

2　土井孝之「紀伊地域」寺沢薫・森岡秀人編著『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　1989年

註１　和歌山市教育委員会　『山口遺跡第５次発掘調査報告書』1990年

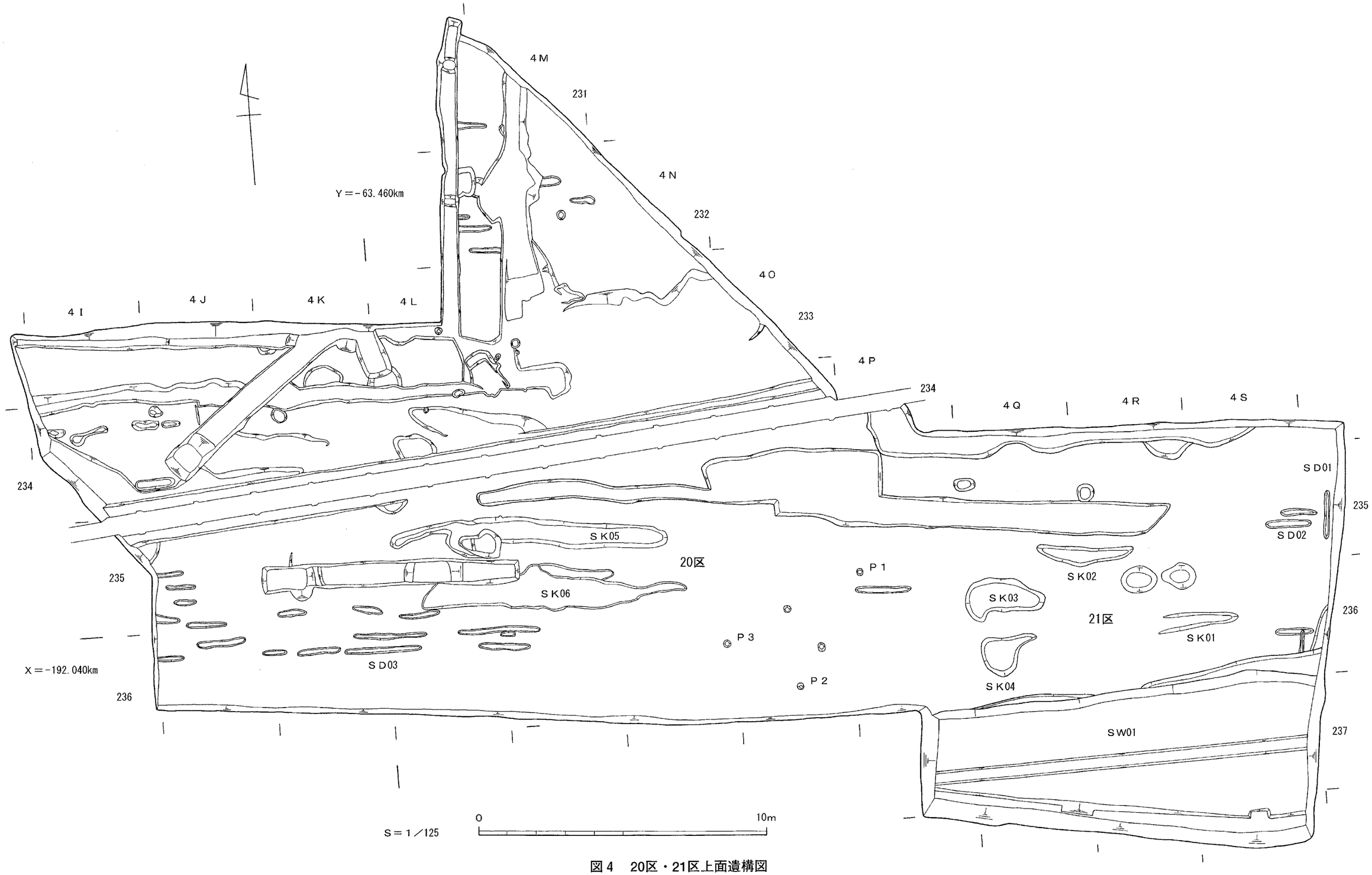


図4　20区・21区上面遺構図

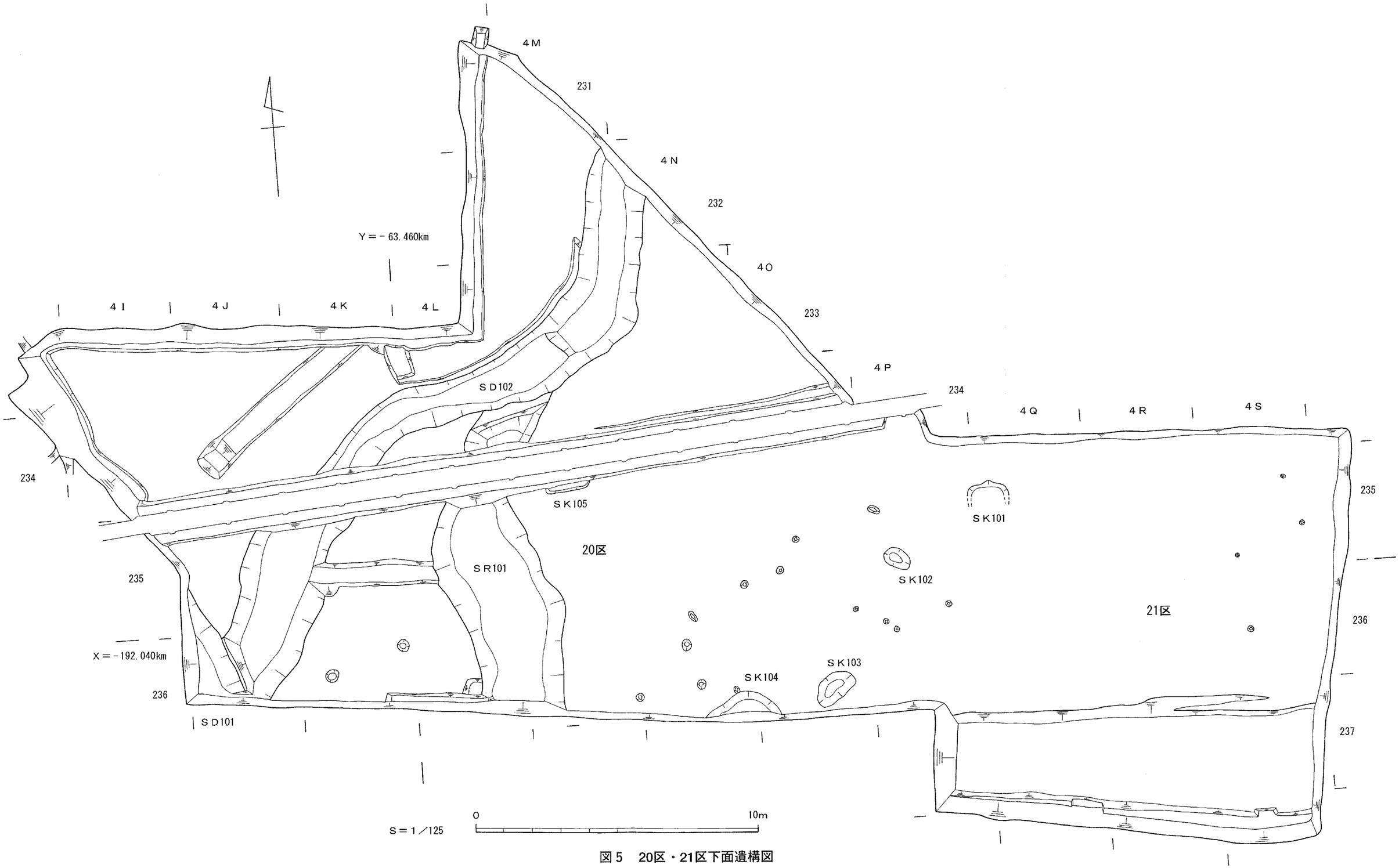


図5　20区・21区下面遺構図

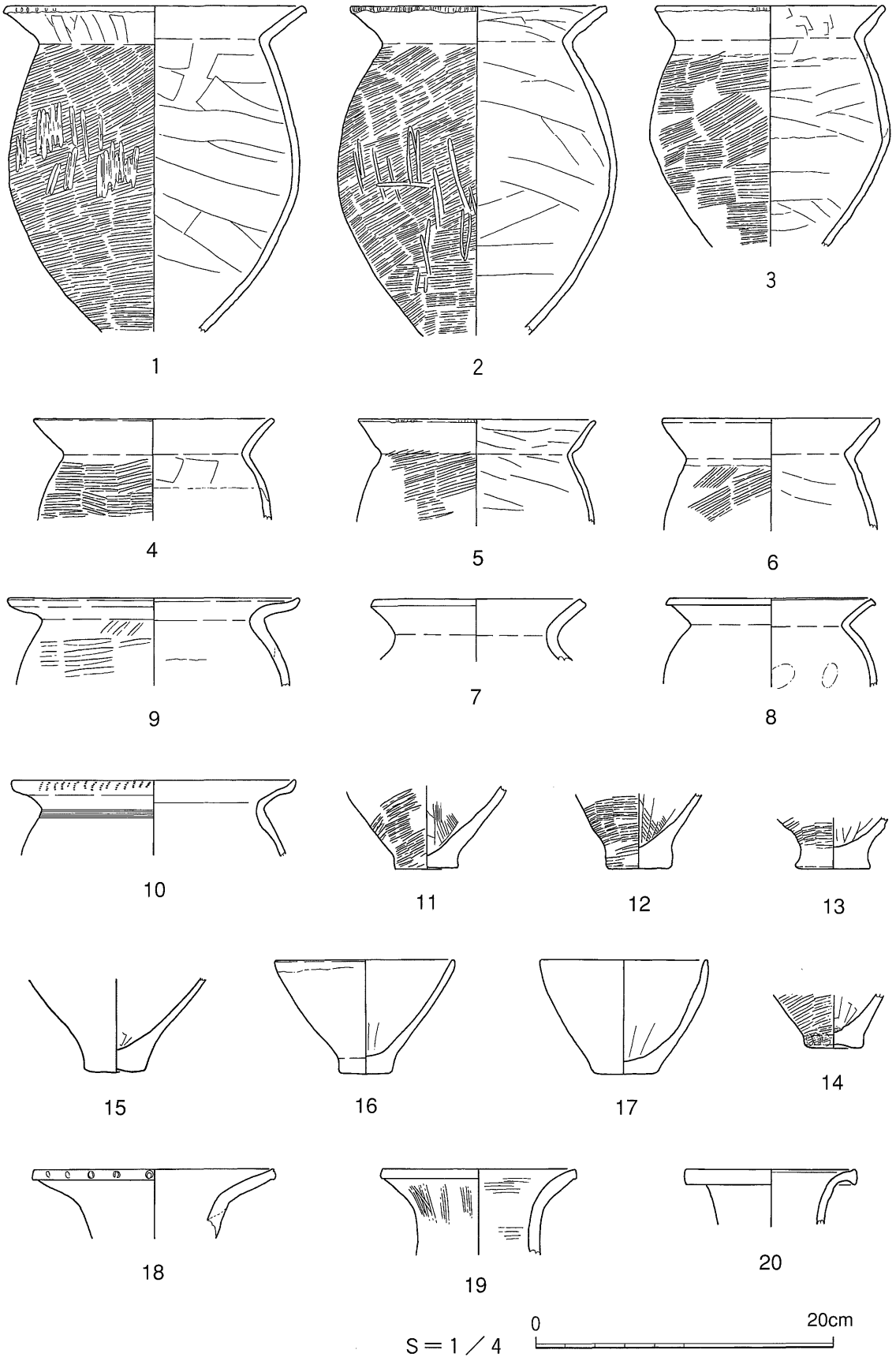


図6　遺物実測図1

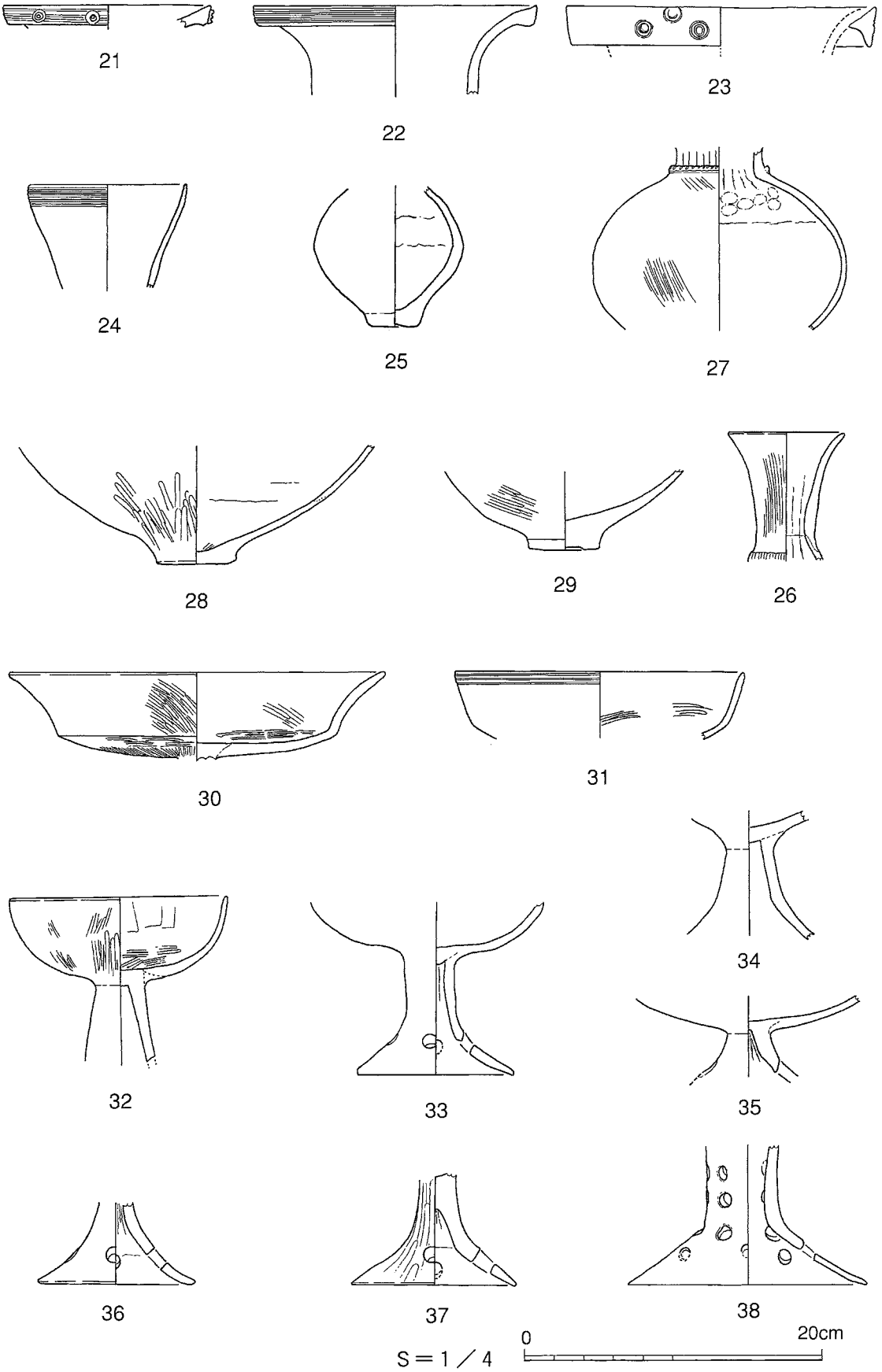


図７　遺物実測図２

出土遺物観察表

挿図番号	器類	器種	出土地点	法量（cm）				特徴（形態・手法等）
				口径	器高	胴径	底径	
1	弥生土器	甕	SD102 下層 4J235区	19.6		19.4		体部外面は右上がりのタタキ痕と縦方向のミガキがみられ、内面はハケ状工具でナデている。口縁端部は刻み目を施し、外面には黒斑が見られ、1～8mmの結晶片岩・石英・赤色酸化粒の砂粒を少量含む。
2	弥生土器	甕	SD102 下層 4J235区	17.0		18.6		体部外面は右上がりのタタキ痕と縦方向のミガキがみられ、内面はハケ状工具でナデている。口縁端部は刻み目を施し、1～6mmの結晶片岩・赤色酸化粒の砂粒を少量含み、焼成堅緻である。
3	弥生土器	甕	SD102 下層 4J235区	15.0		16.1		体部外面は右上がりのタタキ痕が見られ、下半部はさらに平坦な工具で叩き締めている。内面はハケ状工具でナデている。口縁端部は疎らに刻み目を施し、1～2mmの結晶片岩の砂粒を少量含み焼成堅緻である。
4	弥生土器	甕	SD102 下層 4J236区	16.1				体部外面は水平方向のタタキ痕が見られ、さらに平坦な工具で叩き締めている。内面はハケ状工具でナデている。外面には黒斑がみられ、1～4mmの結晶片岩·赤色酸化粒の砂粒を少量含み焼成堅緻である。
5	弥生土器	甕	SD102 下層 4J235区	15.8				体部外面は右上がりのタタキ痕がみられ、内面はハケ状工具でナデている。口縁端部には部分的に浅い刻み目がみられ、1～2mmの結晶片岩・赤色酸化粒の砂粒を少量含み焼成堅緻である。
6	弥生土器	甕	SD102 底面 4M234区	14.4				体部外面は右上がりのタタキ痕がみられ、さらに平坦な工具で叩き締めている。内面は指でナデている。1～3mm大の結晶片岩・赤色酸化粒の砂粒を少量含み焼成堅緻である。
7	弥生土器	甕	SD102 下層 4N232区	14.3				摩滅が著しく、内外面とも調整不明。口縁端部は面をなす。1～9mmの結晶片岩の砂粒と赤色酸化粒を少量含む。
8	弥生土器	甕	SD102 下層 4J235区	14.0				内外面ともナデ調整で、内面には指頭圧痕がみられる。口縁端部は上下に拡張され、面をなす。
9	弥生土器	甕	SD102 下層 4J236区	19.4				体部外面は水平方向の粗いタタキ痕が見られ、内面は指でナデている。口縁端部は上方につまみ上げて受け口状になっている。1～3mmの結晶片岩の砂粒を多量に含む。
10	弥生土器	甕	SD102 下層 4N233区	18.8				内外面ともナデ調整がみられる。口縁端部は上方に彎曲してつまみ上げ、斜めの列点紋を施す。頸部には4条の擬凹線がめぐる。
11	弥生土器	甕	4S236区 Ⅳ層				4.2	外面には右上がりのタタキがあり、内面はハケ状工具によるナデがみられる。底面は平坦で焼成堅緻。
12	弥生土器	甕	4S235区 Ⅳ層				4.4	外面には平行方向のタタキがあり、内面はハケ状工具によるナデがみられる。下方に突出し、底面は平坦で焼成堅緻。
13	弥生土器	甕	4K235区 Ⅲ層				5.0	外面には右上がりのタタキがあり、底部は下方に突出し、平坦。
14	弥生土器	鉢	SD102 下層 4J235区				3.9	外面には右上がりのタタキがあり、指頭圧痕がみられる。底面中央は少し凹む。
15	弥生土器	鉢	SD102 下層 4J235区				4.0	内外面ともナデ調整で、焼成堅緻。外面に黒斑あり。
16	弥生土器	鉢	SD102 下層 4K235区	12.0	7.6		3.6	内外面ともナデ調整で、内面にはヘラ状工具の圧痕がみられる。1mm大の赤色酸化粒を多量に含む。底面は平坦で外面に黒斑あり。
17	弥生土器	鉢	SD102 下層 4N232区	11.0	7.6		4.0	調整不明だが、内面にはヘラ状工具痕あり。1～3mmの赤色酸化粒を多量に含む。底面は平坦。
18	弥生土器	広口壷	SD102 上層 4M233区	16.0				口縁は大きく外反して端部は面をなし、竹管紋を施す。調整不明。
19	弥生土器	広口壷	SD102 上層 4K234区	13.2				外面は縦方向、内面は横方向のミガキが見られ、口縁端部は面をなす。

出土遺物観察表

挿図番号	器類	器種	出土地点	法量（cm）				特徴（形態・手法等）
				口径	器高	胴径	底径	
20	弥生土器	広口壺	4M233区 Ⅳ層	11.2				調整不明。口縁端部は上下に肥厚し、1～3mmの結晶片岩・石英を多量に含む。
21	弥生土器	広口壺	SD102 上層 4L234区	13.8				口縁端部は上下に肥厚し、4条の擬凹線を施し、円形浮紋を貼り付けている。
22	弥生土器	広口壺	SD102 下層 4M234区	19.0				調整不明。口縁端部は上下に肥厚し、4条の浅い凹線がめぐる。1～8mmの結晶片岩・石英・赤色酸化粒を多量に含む。
23	弥生土器	広口壺	4M233区 Ⅳ層	20.8				口縁端部は垂下し、竹管紋が2段に千鳥状に施されている。
24	弥生土器	長頸壺	20区 P2	10.4				調整不明。頸上部に7条の擬凹線を施す。1～3mmの結晶片岩・石英を少量含む。
25	弥生土器	壺	SD102 下層 4J236区				3.0	調整不明。底面中央は少し凹む。1～8mmの結晶片岩・石英・赤色酸化粒を多量に含む。
26	弥生土器	細頸壺	SD102 下層 4J235区	7.8				外面は縦方向のミガキがあり、内面は横ナデがみられる。頸部下端に細かい刻み目を持つ低い突帯がめぐる。
27	弥生土器	細頸壺	SD102 下層 4J235区			17.0		外面は縦方向のミガキがあり、内面は指おさえとナデがみられる。頸部下端に斜めの細かい刻み目を持つ突帯がめぐる。外面は鈍い橙色で、内面は暗灰色。
28	弥生土器	壺	SD102 下層 4J235区				5.2	外面にはミガキがみられ、体部は外側に大きく開き、低い底部がつく。
29	弥生土器	壺	SD102 下層 4J236区				4.8	外面はミガキ、内面はナデ。底面中央は少し凹む。
30	弥生土器	高杯	SD102 下層 4J235区	25.0				皿形の高杯で、口縁部は外反し、扁平である。内外面には密なミガキがみられる。脚との接合部は粘土円盤充填技法である。
31	弥生土器	高杯	SD102 下層 4J236区	19.2				椀形の高杯で、内面は横方向のミガキがあり、口縁部に3条の擬凹線がめぐる。内外面に黒斑あり。
32	弥生土器	高杯	SD102 下層 4M235区	14.3				椀形の高杯で、外面には縦方向のヘラミガキがある。内面は底部が横方向のヘラミガキで上半部は板状工具のナデがみられる。
33	弥生土器	高杯	SD102 上層 4L234区				10.4	杯部が椀形で、口径が脚裾部径より大きい高杯。摩滅のため調整不明。
34	弥生土器	高杯	SD102 下層 4J235区					摩滅のため、調整不明。脚部は中空で黒斑あり。
35	弥生土器	高杯	SD102 下層 4J235区					調整不明。杯·脚とも扁平で外方に大きく開く。脚部には直径1.8cm程の円孔が2ケ所にある。
36	弥生土器	高杯	SD102 下層 4J236区				10.5	摩滅のため、調整不明。裾部は大きく開く。
37	弥生土器	高杯	SD102 下層 4N232区				11.0	外面には太いミガキがみられ、1～5mmの結晶片岩・赤色酸化粒の砂粒を多量に含む。
38	弥生土器	器台	SD102 下層 4N232区				16.0	摩滅のため調整不明。円孔が縦方向に3ケ×5列と裾部に5ケの20ケみられる。脚裾は扁平で大きく開く。

1.　20区上面遺構全景（北西から）

2.　20区下面遺構全景（北西から）

1.　20区南東部下面遺構（東から）

1．　20区溝ＳＤ102（北から）

1．　20区溝ＳＤ101土層堆積状況

2．　21区上面遺構全景（西から）

3．　21区下面遺構全景（西から）

4．　20区南西部の鋤溝群（西から）

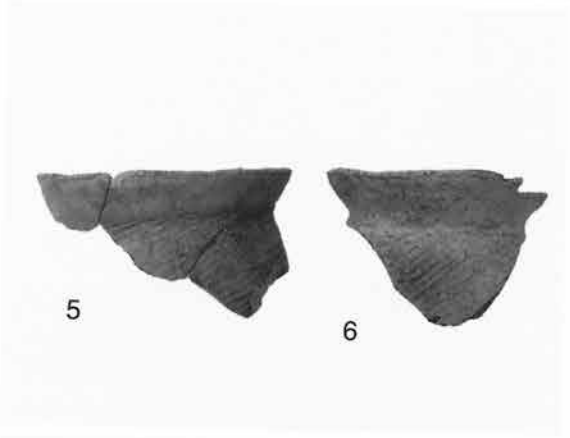
5．　20区溝ＳＤ102甕出土状況

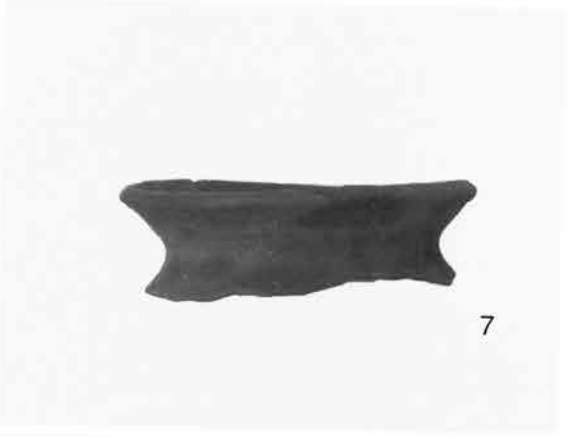
1

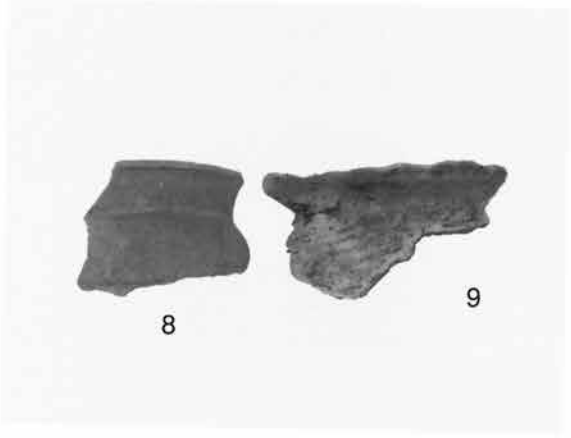
2

3

4


5
6


7


8
9

10

11
12
13
14

15

16

17

18

20

21
23

22

24

25

26

27

28

29

30

32

33

34

35

36

37

38

報告書抄録

ふりがな	あらたいせきだいろくじはっくつちょうさ
書名	荒田遺跡第６次発掘調査
副書名	県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う発掘調査
編著者名	黒石　哲夫
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8268　和歌山県和歌山市広道20番地　TEL 073-433-3843
発行年月日	西暦2001年７月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
あらたいせき 荒田遺跡	わかやまけん 和歌山県 ながぐん 那賀郡 いわでちょう 岩出町 もり 森	32670	6	34°16'0" 東経 135°18'40"	20010119～ 20010731	622㎡	県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒田遺跡	散布地	弥生時代	溝・柱穴・土坑	弥生土器・サヌカイト剥片	弥生時代後期中葉の溝から壺・甕・鉢・高杯・器台などがまとまって出土した。段丘上部に同時期の集落が存在している可能性がある。
		鎌倉時代	溝・柱穴・土坑	瓦器椀・土師皿	

荒田遺跡第6次発掘調査

―― 県道泉佐野岩出線道路改良
工事に伴う発掘調査報告書 ――

2001年７月

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷
製本　西岡総合印刷株式会社